

女子学生の制服、女性の表象を通じたジェンダー規範の記号論 教師の解釈

板敷 ヨシコ（女性社会研究所）

発表要旨：

世界で最も男性的な社会のひとつである日本では、統計によると、女性は抑圧を経験する可能性があり、家庭内や企業内で男性に従属することが期待されている。女性が大企業の重役の地位に「上り詰めた」としても、規範は、女性が男性に従属し続け、育児をほぼ一人で担うことを規定している。この現象は、日本で広く浸透している「良妻賢母」イデオロギーと密接に結びついている。このイデオロギーは、具体的な物質的、視覚的、行動的、美的実践に深く根ざしており、イデオロギー的意味を探索する視覚的アプローチが、それを調査する適切な選択となりうることを示唆している。したがって、この質的研究は、記号論と視覚文化が交差する学校教育の中で、このイデオロギーに関連する教師の見解に光を当てる（可視化する）ことを目的としている。

この研究では、16 人の教師の参加を通じて、さまざまな研究や教育概念を探索するために視覚メディアを応用する記号論的・視覚文化的アプローチや手法である探究グラフィックスを用いる (Lackovic, 2020)。インタビューの目的は、日本社会における女子の制服に象徴される意味と、それが女子の性別役割分担や進路希望に関する認識にどのような影響を与えているかを、教師の視点から深く掘り下げることである。より深い洞察のために記号論を用いることで、この視覚的探求は、参加者と研究者が選んだ制服、女子生徒の制服、女性にとって望ましいキャリアのイメージをめぐる洞察を含む。これは、日本社会における女子と女性の位置づけに関する暗黙的で潜在的な連想と、学校における女子の位置づけと女性のキャリアに関する教師の見解を明らかにするのに役立つだろう。

その結果、教師は一般的に「良妻賢母」イデオロギーの要素を、様々な程度で、時には無意識的に、自分たちの見解を進歩的なものとして表しながらも、示していることが示唆された。これは、性別や勤務する学校のタイプによる違いは見られるものの、すべての教師において顕著であった。

この研究は、「良妻賢母」イデオロギーに牽引され、高度に男性化された社会の中で、学校という文脈の中で永続する「文化資本」に光を当てるものである。女子生徒の将来のキャリアへの影響は、専業主婦や母親以外の様々なライフスタイルへの野心や可能性を学校が抑制していることかもしれない。学校教育において、女子の野心や自己実現が意図せず抑圧されている可能性に対処することの重要性が浮き彫りになった。この研究は、日本の教育においてより解放的な対話を促進する必要性を指摘しており、それは日本だけでなく、同じような価値観を共有する社会においても、女性の未来を形作る可能性がある。